

## 1. 背景 ~壊れた線路と地域の生活~



宮城県東松島市には仙石線と呼ばれる一本の線路が通っていた。その中でも野蒜～東名駅間は、東日本大震災による津波の影響で、特に壊滅的な被害を受けた。現在東松島市では、この区間を当時のままに復旧する案と、両駅並びに周辺の生活を高台へ移す案とで議論がなされているが、解決の目処は立っていない。

我々はこの両案に取って代わる長期的なまちづくりの展望として、ここに提案を行う。

この地域は以前からたびたび水害に見舞われていた。そのため、地域の主要なインフラである路線を高台に移すことを提案したい。しかし、農漁業関係者が多く暮らす地域であるため、路線とともに住居を高台に移し、生活の場と仕事の場(田畑や海)を分離することは困難であり、経済的負担も大きい。彼らの生活を守り、コミュニティがこれまでよりも一段と強く繋がりをもつ安全・安心のまちづくり実現のために、廃線となるこの空間を利用する。

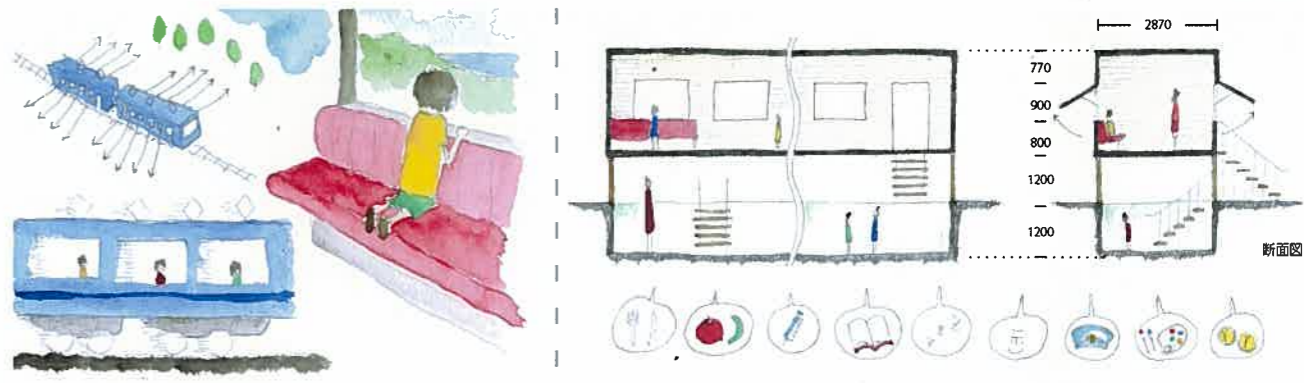
## 2. まちづくり概念図 ~子どもと大人をつなぐ一本の道~



「子どもが自由に振る舞い、大人が安心して見守ることのできるまちづくり」を提案する。

仙石線跡を「みちくさ通り」と改める。沿道には住居、田畑、公園、林などさまざまな要素を配し、子どものみちくさあそびを誘発する。津波の到達範囲から作成した避難経路とみちくさ通りの交点において、みちはふくらみをもち、地域コミュニティの拠点となる(みちくさの駅)。大人と子どもの居場所は区分けされつつも、互いに寄り添うように配置されることにより、大人は子どもを見守り、地域全体で子どもを育てていく。

## 3. 車窓の記憶、コミュニティを支える建築

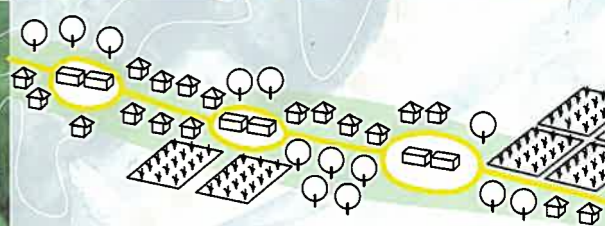


かつてここを走る電車の車窓からは、のどかな日本の風景を望むことができたが、今回の震災によってその多くは破壊されてしまった。しかし中には震災以前の面影を偲ばせる場所、被害を受けずに残った場所もあり、それらの風景を残すことは、以前の記憶を次世代の子どもたちに継承していくためにも、大変意義のあることである。

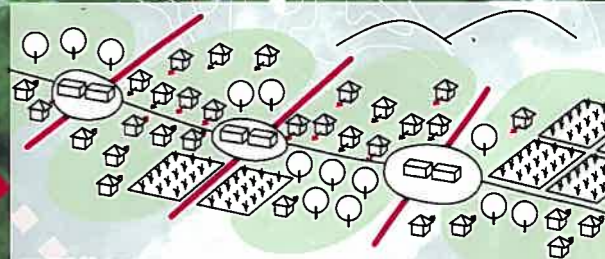
この建築には電車の車窓と同じ位置に開口が設けられている。人々はここから風景を見ることによって、震災以前の風景を想起するとともに、忘れてはならない震災の記憶を頭の中に留め、継承していく。また、図書館、診療所、郵便局、学童保育などの地域を支える機能をもつことにより、徒歩圏で成り立つコンパクトな社会を形成し、地域のつながりをより強いものにする。

# マスタープラン

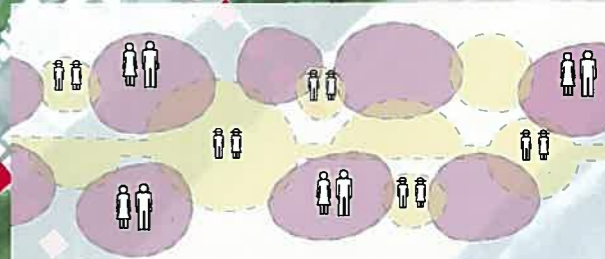
1. 津波最高到達ラインを把握し、さらに上の高台へと至る最短の避難路を設ける。東名運河にかかる橋の数を増やし、避難の円滑化を図る。
2. 避難路と廃線の交点に建築を配し、コミュニティ形成の場(みちくさの駅)をつくる。
3. 地域の特徴に応じ、必要な機能を建築に与えていく。
4. 沿線に公園や田畑、松並木を設け、多様な居場所をつくる。全体が細長い公園(災害時は防火帯)となることを目指す。
5. 廃線の道を「みちくさ通り」と名付け、徒歩による行動域を広げる。やがてコミュニティが拡大し、力強い結束を生む。



■ 線的につながるコミュニティ  
多様な居場所を結ぶ一本のみの存在。地域内での世代を越えた強い結束が復興への大きな原動力となる。



■ 面的に広がるコミュニティ  
これまで地域を隔っていた線路は生まれ変わり、みちくさ通りを中心に地域のつながりが面的に広がっていく。



■ 子どもと大人が安心できるまちづくり  
子どもの居場所と大人の居場所が隣り合って点在している。地域全体で子どもを育て、見守っていく。

敷地図 1/6000



- ① みちくさ通り  
子どもの活発な活動を助ける多様なみち。みちは膨らみ多様な場所をつくり出す。大人は少し離れて子どもの成長を見守る。
- ② みちくさ図書館  
学校の帰り道、子供たちが本を読んだり、宿題をしたりする。大人と子どもでゾーンを分離する。
- ③ 番屋としての建築  
農漁業関係者が休憩したり、とれたものを振る舞う為の施設。田畑や海の近くに設置し、地域産業を支える。
- ④ 記憶の写真館  
震災の記憶を後世に伝えていく為の場所。ただひとつ開けられた額縁の窓からは復興されてゆく東松島市の風景が輝かしく見えている。

